

には、既に説明したように、ゲージ変換を用いて自由度が2の状態にまで電磁ポテンシャルを書き直すことができた。それでは量子化された電磁場に対しても同様の制限  $\partial^\mu A_\mu = 0$  を課せばいいのでは？と考えたくなるが、それでは問題は解決できない。(V.29) 式より

$$\pi^0(x) = F^{00}(x) - g^{00}[\partial_\mu A^\mu(x)] = -\partial_\mu A^\mu(x)$$

となるので、 $\partial_\mu A^\mu = 0$  を要求するということは  $\pi^0 = 0$  を意味し、せっかくゲージ固定項の導入で回避した問題が再び現れてしまうからである。

これに対する量子論的解決策は**グプタ**(Gupta)と**ブロイラー**(Bleuler)により見出された。その「グプタ-ブロイラー形式」のポイントは、4種類の生成演算子  $a^\dagger(\mathbf{p}, \lambda)$  が生み出す全体のフォック空間の中の状態ベクトルに**補助条件**(Subsidiary condition)と呼ばれる条件を課して**正定値計量**(Positive definite metric)を持つ部分空間(Subspace)を抜き出し、それを現実の光子世界と同定することである。具体的には  $\partial_\mu A^\mu = 0$  を「演算子の関係」ではなく、

$$\langle \Psi | \partial_\mu A^\mu(x) | \Psi \rangle = 0 \quad (\text{V.37})$$

を満足する  $|\Psi\rangle$  だけが物理的に意味のある状態を記述するという**状態ベクトルに対する条件**と再解釈するのである。この式は、 $\partial_\mu \langle \Psi | A^\mu | \Psi \rangle = 0$  と書き直せば古典場-量子場の関係(II.58)よりわかるように**対応する古典電磁場へのローレンツ条件**を表す。以上の筋書きは  $A^\mu$  の消滅演算子部分  $A^{(a)\mu}$  を用いた補助条件

$$\partial_\mu A^{(a)\mu}(x) | \Psi \rangle = 0 \quad (\text{V.38})$$

(Guptaの補助条件)の導入で実現できる。何故なら、そのエルミート共役な関係として生成演算子部分  $A^{(c)\mu} (= [A^{(a)\mu}]^\dagger)$  が  $\langle \Psi | A^{(c)\mu} = 0$  を満たすからである。

補助条件(V.38)に  $A^\mu$  の平面波展開(V.35)を代入し、横波を表す偏極ベクトル  $\varepsilon^\mu(\mathbf{p}, \lambda = 1, 2)$  が(V.14)式

$$p_\mu \varepsilon^\mu(\mathbf{p}, \lambda = 1, 2) = 0$$

## ● 実ベクトル場

$$A^\mu(x) = \int d^3\tilde{\mathbf{k}} \sum_{\kappa=0}^3 [a(\mathbf{k}, \kappa)\varepsilon^\mu(\mathbf{k}, \kappa)e^{-ikx} + a^\dagger(\mathbf{k}, \kappa)\varepsilon^{\mu*}(\mathbf{k}, \kappa)e^{ikx}] \quad (\text{V.89})$$

## ● 複素ベクトル場

$$A^\mu(x) = \int d^3\tilde{\mathbf{k}} \sum_{\kappa=0}^3 [a(\mathbf{k}, \kappa)\varepsilon^\mu(\mathbf{k}, \kappa)e^{-ikx} + b^\dagger(\mathbf{k}, \kappa)\varepsilon^{\mu*}(\mathbf{k}, \kappa)e^{ikx}] \quad (\text{V.90})$$

(但し,  $k^0 = \sqrt{\mathbf{k}^2 + m^2}$ ) と得られ, 展開の各係数は

$$\begin{aligned} [a(\mathbf{p}, \lambda), a^\dagger(\mathbf{p}', \lambda')] &= [b(\mathbf{p}, \lambda), b^\dagger(\mathbf{p}', \lambda')] = -(2\pi)^3 2p^0 g^{\lambda\lambda'} \delta^3(\mathbf{p} - \mathbf{p}'), \\ [a(\mathbf{p}, \lambda), a(\mathbf{p}', \lambda')] &= [a^\dagger(\mathbf{p}, \lambda), a^\dagger(\mathbf{p}', \lambda')] = [b(\mathbf{p}, \lambda), b(\mathbf{p}', \lambda')] \\ &= [b^\dagger(\mathbf{p}, \lambda), b^\dagger(\mathbf{p}', \lambda')] = [a^{(\dagger)}(\mathbf{p}, \lambda), b^{(\dagger)}(\mathbf{p}', \lambda')] = 0 \end{aligned} \quad (\text{V.91})$$

(もちろん実場には  $a, a^\dagger$  のみ関与) を満たす生成消滅演算子となる.

なお, この場合も, 始めからファインマンゲージを採用するならラグランジアン (V.82, V.83) はそれぞれ (発散項を除いて)

$$\mathcal{L}(x) = -\frac{1}{2}\partial_\mu A_\nu(x)\partial^\mu A^\nu(x) + \frac{1}{2}m^2 A_\mu(x)A^\mu(x) \quad (\text{V.92})$$

$$\mathcal{L}(x) = -\partial_\mu A_\nu^*(x)\partial^\mu A^\nu(x) + m^2 A_\mu^*(x)A^\mu(x) \quad (\text{V.93})$$

と扱い易い形となる.

**問題 V.18** 上記のラグランジアンから  $\pi^\mu(x)$  を求め, それを  $a^{(\dagger)}, b^{(\dagger)}$  で表せ. 次に, 生成消滅演算子が (V.91) 式を満たすなら実際に量子化条件 (V.87) が成り立つことを確認せよ.

さて, この場合も (V.91) からわかるように, 生成消滅演算子の第 0 成分の交換関係から不定計量問題が現れるので, 電磁場に倣って物理的状態が  $\langle \Psi | \partial_\mu A^\mu | \Psi \rangle = 0$  を満たすよう

$$\partial_\mu A^{(a)\mu}(x)|\Psi\rangle = 0$$

(+複素場の  $A^{\mu\dagger}$  への条件) という補助条件を課したくなるが、実はこれは許されない。本書ではこれまで触れなかったが、各量子場の間には、正準量子化の際に設定される同時刻交換関係の他に、同時刻ではない4次元的な交換関係も存在する。例えば、ここで考えている実ベクトル場の関係は、不変デルタ関数と呼ばれる関数

$$\begin{aligned}\Delta(x-y) &\equiv -i[\phi(x), \phi(y)] \\ &= -i \int d^3\tilde{\mathbf{k}} [e^{-ik(x-y)} - e^{ik(x-y)}]\end{aligned}\quad (\text{V.94})$$

( $\phi$  は質量  $m$  の実スカラー場) を用いて

$$[A^\mu(x), A^\nu(y)] = -ig^{\mu\nu} \Delta(x-y) \quad (\text{V.95})$$

と与えられる。この  $\Delta$  は、定義からわかるように

$$(\square + m^2)\Delta(x-y) = 0$$

を満たすので、上記  $A^\mu$  の4次元交換関係より

$$[\partial_\mu A^\mu(x), \partial_{(y)\nu} A^\nu(y)] = i\partial_\mu \partial^\mu \Delta(x-y) = -im^2 \Delta(x-y) \neq 0 \quad (\text{V.96})$$

が得られるが、これは  $\partial_\mu A^{(a)\mu}|\Psi\rangle = 0$  とは両立できないのである。<sup>#V.8</sup>

この問題の一つの解決策は、 $A^\mu$  とは独立だが同じ質量を持つ実スカラー場  $\phi$  を同時に考えて  $\langle\Psi|\partial_\mu A^\mu + m\phi|\Psi\rangle = 0$  と要請する、すなわち

$$[\partial_\mu A^{(a)\mu}(x) + m\phi^{(a)}(x)]|\Psi\rangle = 0 \quad (\text{V.97})$$

という補助条件を導入することである。これは、 $m \rightarrow 0$  の極限を考えればわかるように、グプタ-ブローイラー形式の自然な拡張と言える。或いは、修正されたベクトル場

$$\mathcal{A}_\phi^\mu(x) \equiv A^\mu(x) - \frac{1}{m} \partial^\mu \phi(x) \quad (\text{V.98})$$

---

<sup>#V.8</sup>ここでは  $y$  微分を  $\partial_{(y)}$  と表した。  $\Delta$  は  $x-y$  だけに依存するので  $\partial_{(y)}\Delta = -\partial\Delta$  であることに注意しよう。ちなみに、(V.96) は  $m=0$  (つまり電磁場) なら何の問題も発生しないことも示している。

を導入し,

$$\langle \Psi | \partial_\mu \mathcal{A}_\phi^\mu(x) | \Psi \rangle = 0 \quad \Longrightarrow \quad \partial_\mu \mathcal{A}_\phi^{(a)\mu}(x) | \Psi \rangle = 0 \quad (\text{V.99})$$

と表現してもよい. この  $\mathcal{A}_\phi^\mu$  の 4 次元的交換関係は

$$[\mathcal{A}_\phi^\mu(x), \mathcal{A}_\phi^\nu(y)] = -i \left( g^{\mu\nu} + \frac{1}{m^2} \partial^\mu \partial^\nu \right) \Delta(x-y) \quad (\text{V.100})$$

なので  $[\partial_\mu \mathcal{A}_\phi^\mu(x), \partial_{(y)\nu} \mathcal{A}_\phi^\nu(y)] = 0$  となり,  $\partial_\mu \mathcal{A}_\phi^{(a)\mu} | \Psi \rangle = 0$  との間に矛盾は生じない. 複素ベクトル場についても, 同じ質量および電荷を持つ複素スカラー場を用いて同様の補助条件を設定できる.

次に, これらの条件に  $A^\mu$  の平面波展開 (V.89) と III 章で調べたスカラー場の平面波展開を代入すれば, ここでも (V.39) のように消滅演算子を用いた表現が得られる. 但し, 運動量と偏極ベクトルの間には, 電磁場の場合とは違って縦波成分も含めた  $p_\mu \varepsilon^\mu(\mathbf{p}, \lambda = 1, 2, 3) = 0$  の関係があるので, それは

$$[a(\mathbf{p}, 0) + ia(\mathbf{p})] | \Psi \rangle = 0, \quad [b(\mathbf{p}, 0) + ib(\mathbf{p})] | \Psi \rangle = 0 \quad (\text{V.101})$$

となる. 電磁場の場合は, 非物理的な縦波およびスカラー成分が打ち消し合う形だったが, ここではスカラー成分とスカラー場の寄与が打ち消し合うという条件である.

**問題 V.19** (V.94, V.95) で与えた  $\phi$ ,  $A^\mu$  の 4 次元的交換関係と  $[\phi(x), A^\mu(y)] = 0$  を用いて  $\mathcal{A}_\phi^\mu$  の 4 次元的交換関係 (V.100) を導け.

**問題 V.20** 実ベクトル場に対し, スカラー成分 + スカラー場の個数演算子を

$$N_{0S} = \int d^3 \tilde{\mathbf{k}} [-a^\dagger(\mathbf{k}, 0)a(\mathbf{k}, 0) + a^\dagger(\mathbf{k})a(\mathbf{k})]$$

と定義する. その固有値・固有状態  $N_{0S} |\Psi_n\rangle = n |\Psi_n\rangle$  において,  $n \neq 0$  なら  $\langle \Psi_n | \Psi_n \rangle = 0$  であることを示せ. また, 複素ベクトル場に対しても同様に調べてみよ.

ここで読者は“ベクトル場の量子化なのに何故スカラー場を持ち込むのか. ベクトル場だけで話を完結させることはできないのか?”という疑問を持つかも知